

龍瑛宗の読んだ中国文学：日本語の翻訳による受容

著者	王 惠珍
雑誌名	關西大學中國文學會紀要
巻	27
ページ	A131-A150
発行年	2006-03-20
その他のタイトル	Chinese Literature in Long's Reading : Adoption into Long's Translation of Japanese Literatur
URL	http://hdl.handle.net/10112/12605

龍瑛宗の読んだ中国文学

——日本語の翻訳による受容——

王 惠 珍

1. 前 言

龍瑛宗（1911～1999）は1911年、台湾新竹北埔で生まれた日本統治期に創作をはじめた客家人作家である。祖籍は広東省潮州府饒平県石井村。8才の時、通っていた彭家の漢文塾が日本の警察の干渉を受け、閉鎖したので、彼は漢文（中国の古典文学）を習うことができなかった。9才で公学校（台湾人用小学校の称呼）に入学する。1930年台湾商工学校を卒業する。彼は留学経験がなく、すべて台湾の植民地教育を受けたのである。中国通俗文学に対する知識は、父親や田舎廻りの役者などから聞いた話から得たものである¹⁾。一方、中国文学に対する知識は、殆ど書物から得たものである。本稿では、龍瑛宗が日本語の書物を通じてどのように中国文学を受容したか、また、それは彼の創作にどのような影響をもたらしたかを考察したい。

2. 魯迅文学の理解

戦前戦後を通じて、龍瑛宗が最もよく言及している中国作家は魯迅である。その理由の一つは、1937年頃『大魯迅全集』を入手したことにあると思われる。岡崎俊夫は、「日本における魯迅観」で、「1937年にはじまった日本帝国主義の対華侵略は、日本人の間に中国への関心を多く呼びおこした。出版界にも中国ブームが現出した。そのなかで文学関係のものがかな

り多く紹介された。だが、その読まれた方は、文学としてよりも、日本の新植民地の風土、民俗に対する興味といったものが支配的であった。魯迅についても同様である。この年の初めに、前年亡くなった魯迅を記念する意味で『大魯迅全集』が出て、表面的には、魯迅はますます日本に普及したには間違いはないが、理解の度は必ずしも普及の度と一致していなかった¹⁾と述べている。

では、植民地台湾に在った龍瑛宗は、戦前、日本に普及した魯迅の文学をどのように理解していたのだろうか、また、戦後初期には、どのように魯迅を紹介していたのだろうか。

日本統治期の台湾における魯迅文学の受容について、中島利郎は、「日本統治下の台湾新文学と魯迅」で三期に分けて論じている³⁾。

龍瑛宗が魯迅文学を受容したのは、第二期に始まる。第二期には彼は、日本内地から移入した『改造』や『中央公論』などのバックナンバーによって、魯迅の作品及び魯迅に関する文章を直接に読んでいるようである⁴⁾。第三期には、『大魯迅全集』を入手しているので、彼が魯迅の作品を読むことは容易であった。

龍瑛宗は、以下の6篇の文章の中で魯迅及びその作品について言及している。処女作「パイヤのある街」(『改造』19-4, 1937年4月)、「ゴオゴリとその作品 初めて文學せんとする人の為に」(『臺灣新民報』, 1940年6月5日)、「二つの〈狂人日記〉」(『文藝首都』8-10, 1940年12月)、「阿Q正傳(魯迅作)」(『中華日報』, 1946年5月20日)、「中國文學の動向」(『中華日報』, 1946年8月16日)、「中國近代文學の始祖 魯迅逝世十週年記念日に際して」(『中華日報』1946年10月19日)。前三篇は、戦中期、後三篇は戦後初期に書かれている。

この6篇の中で、龍瑛宗がどのように魯迅文学に言及し、論じているかを順を追って考察する。

まず、処女作「パイヤのある街」では、作中人物林杏南の長男が、自

分の読書遍歴を語る中で、作中に、魯迅の小説「故郷」,「阿Q正伝」の名が登場する。

雑誌は殆ど月遅れの「××」を頼んでゐる。何故なら「××」は日本の現象分析は勿論、海外の思想も大いに紹介してゐるやうだ。朝鮮や中國などの作家も紹介してゐる。文學もいゝですね。僕は文學觀賞だけですけれど、中國の作家たちの作品は藝術的レベルにおいて幾分低いやうだが、これは國亂れては創作もおちおち出来ないだらう。しかし、佐藤春夫の魯迅の「故郷」は深い感銘を受けたね。それから、単行本で深い感銘を受けたのは、エンゲルスの「家族、私有財産、國家の起源」だつた。僕はぐわんとやられたね。在來の觀念が、ぐらぐらと崩れていったのだ。實際どんな困苦を忍んでも本だけは讀みたいね。魯迅の「阿Q正傳」やゴーリキーの作品、それにモルガンの「古代社會の研究」などを讀みたいと思つてゐるが、台北の友人は古本書を漁つてもないといふので、それかと言つて新刊を買ふ金はなしこれ丈は参つた。

ここでいう佐藤春夫の魯迅の「故郷」は、1932年1月『中央公論』に掲載されたものである。又、『阿Q正傳』は、松浦珪三による翻譯が1931年9月「支那プロレタリア小説集」として白揚社から刊行され、さらに、1931年10月、林守仁（1896～1938）訳『支那小説集阿Q正傳』が「國際プロレタリア叢書」として六四書院から刊行されている。林杏南の長男のような台湾青年は、主にこのような日本内地から輸入された雑誌や、プロレタリア系の単行本によって魯迅文學に触れたのだらうと推測できる。

増田渉は、1932年4月、『改造』（14-4）に「魯迅傳」を發表した。この号にはまた、第5回『改造』懸賞創作受賞作として張赫宙の「餓鬼道」が掲載されている。龍瑛宗は、のちに張赫宙の受賞作を讀んだと回想してい

る⁵⁾ので、同じ号に載った「魯迅傳」も読んでいることが推測できる。

魯迅は、1936年10月19日早朝、56才で急逝した。日本では、1936年10月20日から、新聞各紙に魯迅逝去のニュースが報道された。台湾では、台湾総督府発行の『臺灣日々新聞』（1936年10月23日）に、高桑末秀「魯迅逝く——その訃報を前にして——」、写真「魯迅氏の臨終」（10月25日）、新居格「魯迅といふ人——彼の業績を偲んで——」（11月4日）が掲載された。そこでは、魯迅は「現代支那の文豪で〈支那のゴルキー〉と呼ばれてゐる有名な小説家」として追悼されている。1936年11月発行の『臺灣新文學』（1-9）には、王詩琅の巻頭言「魯迅を悼む」と黄得時「大文豪魯迅逝く」の追悼文が掲載されている。魯迅の死は、台湾の文化界でも大きな注目を集めていたことが分かる。

上述の引用文の中に、作中人物林杏南の長男が「阿Q正伝」やゴーリキーの作品を読みたいと思っている、という個所があるが、魯迅は確かにゴーリキーと並び称せられる文学者であった。

魯迅が支那のゴルキーに譬えられることについて、増田渉は、「魯迅の印象補記」で、「魯迅を中国のゴリキーだという譬えは、誰が言いだしたか知らないが、既にその在世当時から言われ、またこの追悼文のなかにもしばしば見かけるやや月並的な比擬……」⁶⁾と述べている。室伏高信も「魯迅の印象」⁷⁾で、「魯迅を支那のゴルキイにたとへるものがある。恐らくこのたとへが魯迅に最もふさはしいことであらう。支那にも一部の青年たちの期待してゐるやうにソヴェイト革命が成功するやうなことがあるとしたら、彼はロシヤにおいてゴルキイのうけた待遇をうけたに違ひないのである。そして多分世界的にも」と述べている。これらは、当時の日本で魯迅を「支那のゴールキー」になぞらえていたことを物語っているものである。龍瑛宗は、いつもこの表現を用いて、魯迅文学を紹介しているのである。

実は、龍瑛宗自身も、「魯迅」と名を並べられ評価されている。葉山嘉

樹は、「パイヤのある街」を批評して、「これは台湾人の悲哀を唄ったものではない。この地球上の虐げられる階級の悲哀を唄ったものである。この精神はプーキン、ゴーリキー、魯迅に通じ、そして日本のプロ作家にも通じてゐる」⁸⁾と述べている。葉山嘉樹は、国際プロ作家との連帯の環を作るものとして、魯迅や、また龍瑛宗の文学精神を評価しているのではないだろうか。

さらに、朝鮮人作家金史良は、龍瑛宗宛の手紙（1941年2月8日）で「魯迅は僕は好きな方です。彼は偉かつたですね。貴兄こそ臺灣の魯迅として築き上げて下さい」、「ただ魯迅のやうな汎文學的な仕事をして下さいといふ程の意味なのです」と書いている。金史良は、被圧迫民族に寄せる魯迅の同情の心に感銘を受けていたので、植民地における武力抵抗が不可能であった時代、龍瑛宗にも、民衆のために魯迅のように「汎文學的な仕事をして下さい」と期待を寄せたのである。金史良は、魯迅と龍瑛宗の間には、ただ左翼的文学者としてだけではなく、中華民族としての絆もあると考えていたのではないだろうか。このような評価を受けたことは、龍瑛宗にとっては喜ばしく名誉なことに思われたのである⁹⁾。

次に、龍瑛宗は、「ゴオゴリとその作品 初めて文學せんとする為に(六)」¹⁰⁾でゴオゴリの「狂人日記」を論じ、あわせて、魯迅の作品「狂人日記」に次のように言及している。

この内（『アラベスキ』、1835年）で最も注目すべきは「狂人日記」だ。魯迅の『呐喊』のなかに收められてゐる彼の處女作「狂人日記」はゴオゴリの「狂人日記」からヒントを得てゐると思ふ。魯迅が「狂人日記」を書いたのは、1918年であるが彼はその当時、最も愛讀した作品はゴオゴリと波蘭のセンキヴィツツであつたと云はれてゐる。

ロシア文學のレヤリズムの鼻祖たるゴオゴリと中國文學のレヤリズムの始祖たる魯迅は同じうして「サタイヤの曠野」に遁入したことは

興味あることではないか。(中略)。

ゴオゴリの「狂人日記」の最後は、「お母さん、子供の病気を憐んで下さい！……えつと、アルヂエリヤの知事の鼻の下に瘤があるのを知ってるますか？」

魯迅の「狂人日記」の最後は「人を食ったことのない子供、それなら未だあるかも知れない？」

「子供を救へ……」

「アルヂエリヤの知事の鼻の下に瘤があるのを知ってるますか」のゴオゴリと「子供を救へ……」の魯迅とは、各々、彼等の作家的未來を豫見せしめる何物かがあるのではなからうか。言ってみれば、ゴオゴリは純粹藝術家であつたに反し、魯迅はさうでない気がする。

ゴオゴリこそは古今、稀にみる独自の藝術家であつたのである。しかしながら作家の教養としてみるとゴオゴリよりも魯迅の方が高い教養を身に付けてゐると思ふ。

次に書いた「二つの〈狂人日記〉」では、このようなゴオゴリと魯迅の文学に対する理解がさらに深められている。

当時、龍瑛宗は、中国語もロシア語も読めなかった。「二つの〈狂人日記〉」では、『呐喊』の序と「狂人日記」の結びの箇所は、改造社の『大魯迅全集』第1巻(1937年2月)の翻訳からそのまま引用され、また、増田渉が「解題」で訳している「私はどうして小説を書き出したか」¹¹⁾(原題：「我怎麼做起小説來」)からもそのまま引用されている。これらのことは、「二つの〈狂人日記〉」を書いていた時、彼が『大魯迅全集』を重要な参考資料として用いていたと考えられる根拠になるだろう。又、調べてみると、ゴオゴリの引用は、『ゴオゴリ全集』¹²⁾第4巻の「狂人の日記」(能勢陽三訳)から引用されたものであることが分かる。

「二つの〈狂人日記〉」で、彼は、まずゴオゴリと魯迅との類似点と相

違点を次のように言及している。

ゴーゴリと魯迅との類似点について彼は、「ゴオゴリはロシア近代文學の鼻祖であり、魯迅も支那近代文學の始祖で共に苛烈なリアリストで諷刺作家であるとは、おもしろい暗合だといへる」と述べている。また、二人の相違点については、龍瑛宗は、「ゴーゴリは晩年に神秘主義に陥った」が、「魯迅は社会を改良しようとして小説を書き、社会、民衆に関心を抱いている」と述べ、また「魯迅はゴオゴリの終點から彼の文學を出發しはじめた」と述べている。

次に、二人の作家的才能と教養について、龍瑛宗は、「ゴオゴリは骨の髄まで藝術家で、他に彼の生き方がなかつた」、「魯迅はゴオゴリとくらべて作家的才能は劣つてゐるが、教養の點においてはまさつてゐる。彼は教養で小説を書いてゐる。作家としてのイメージ成熟をまたないで創造にとりかかる。生硬さを免かれないのはこのゆゑである。」さらに、二つの「狂人日記」の結びを比較し、「ゴオゴリには、詩の領域にまで高められてゐる、はげしい悲哀であり、あきらめである。ゴオゴリの捌け口は、社會の周邊からさへ逃れてはるかな幻想の園にとんでゆく」。だが、「魯迅は小説の枠を突き破つて、そのまま現實のなかへ進んで行つた」と述べている。

その他、作家としての思想について、龍瑛宗は、「フロオベエルも魯迅も同じ思想の衝動に捉はれてゐることだ。いはば、あらゆる偉大な作家に共通する命題である。フロオベエルは絶望しながら〈サランボオ〉を書いた。魯迅は抗議しながら〈狂人日記〉を書いた。フロオベエルも魯迅も共に身をもつて、現實と對決したのであるが、フロオベエルは文學にのがれて、かへつて文學から、こつぴとく復讐されたのであつた。サランボオも魯迅の〈狂人日記〉も生活以前の問題であつて、思惟と現實との衝突にすぎないものであり、肉體と現實との衝突ではない」と述べている。

最後に、彼は、もう一つの魯迅の代表作品「阿Q正伝」を取り上げ、

「魯迅の〈狂人日記〉には、笑ひも涙もない。そこにあるのは、たゞ、作者の〈呐喊〉と〈澀面〉である。澀面は憤りの表情である。」「狂人日記」は「なんと無味無臭の情緒のない骨ばかりの小説」である。だが、「魯迅の觀念的叫喚は僅かなもので〈阿Q正傳〉にいたつて肉體的に呐喊したのであつた」と述べている。

彼は、魯迅が「魯迅の深い悲哀は、文學のなかで鞭になり變つたのである。(中略) 作品を書きあげるには心の平靜と餘裕がなければならぬ。しかるに、魯迅には、長篇がないのも、ここからでも歸結され得るし、彼の作品を貫く焦燥性も説明出来ると思ふ」と述べ、その理由について、「魯迅が小説の創作をやめて、殆ど寸鐵人を刺すやうな短文ばかりをものしたのは、絶えず彼の心を襲つた焦々しさではないか。魯迅小説の政論性も藝術的に豊醇されない生硬性も、人間としての偉大さを銷却するものでなく、かへて彼の生涯を悲劇的に飾つたのである。そして魯迅の焦々しさをつきとめるのは、當時の支那の現實社會をつきとめるに他ならない」と理解しているのである。龍瑛宗は、このような魯迅の創作内容から魯迅の内には在る焦燥を感じ取っているのではないかと思う。

つまり、彼は、魯迅の「狂人日記」に対するゴーゴリの「狂人日記」の影響を論ずることに主眼を置いたのではなく、二人が生きていた社會の相違点を比較し、魯迅の創作から感得される彼の文學的特徴について論じているのである¹³⁾。

1936年に書かれた「パイヤのある街」の中では、魯迅の作品「阿Q正傳」は、エンゲルスの「家族、私有財産、國家の起源」、ゴーリキーの作品、モルガンの「古代社會の研究」とともに言及され、魯迅の作品は、左翼的作品として取り扱われている。だが、その4年後、戦争開始後の1940年に書かれた「二つの『狂人日記』」では、これに代り、ロシアとフランスの作家の文學作品とともに取り上げて、「支那近代文學の始祖」として魯迅の文學的特徴を論じている。

龍瑛宗は、魯迅の深い悲哀や焦燥感を理解し、それが魯迅の社会、民衆に対する深い関心に由来するものであることを高く評価しているのである。

戦後初期、魯迅の作品がすぐに台湾で受容された土壌は、すでに日本植民地時代から台湾人作家自身のなかで醸成されていたと指摘されている¹⁴⁾。その土壌は、世界文学や、国際的にプロレタリア文学との交流が盛んに行われた日本での魯迅理解を基にして作られたものである。

さらに、戦後初期に書かれた三篇「阿Q正傳（魯迅作）」(『中華日報』, 1946年5月20日), 「中國文學の動向」(『中華日報』, 1946年8月16日), 「中國近代文學の始祖 魯迅逝世十週年記念日に際して」(『中華日報』, 1946年10月19日)では、次のように述べられている。

まず、「阿Q正傳（魯迅作）」では、「阿Q」という人物について龍瑛宗は次のように述べている。

阿Qといふ言葉はハムレットや、ドン・キホーテや、シヤイロツクと同じほどに、一つの固有名詞となつて、ある人間タイプの一つの典型を表現するやうになつた。(中略) 中國は三百年間の滿清政府による異族統治、外にあつては帝國主義諸列強による中國搾取、それに軍閥の存在等の條件は、著しく中國人の性格を歪めずにはゐられないのである。たとへば拜金思想、極端な利己主義はその條件から生まれてきたのである。勿論、阿Qといふ男も、これらの條件の中から生れてきたのである。

阿Qといふ性格は、なにも中國人特有の性格ではない、いはば世界何處の國に行つてもこの男は、つねに可笑しく悲しく存在して、強者の嘲笑に曝けだしてゐる。

龍瑛宗は、中国社会の歴史的條件から生まれた「阿Q」という人物が世界文学の中に遍在する「ある人間タイプの一つの典型」だと考えている。

さらに、彼は、作者魯迅をこう紹介している。「魯迅は、生前において中國の惡しき性格をもつとも憎んだ。これは事実である。しかし、これを見て魯迅を以て非愛國者と見做すわけにはいかない。(略)。実はもつとも中國を愛している。」「わが中國の先驅者、魯迅の生涯もまた苦しいものであつた。しかし、魯迅の精神は最後まで健在であつた。ゴーゴリが晩年、神秘主義に陥つたに反し、魯迅が最後までレヤリスチックな精神を持したのは、中國文學の未来のために、レヤリズムの種子をまいたといふべきであらう。」

龍瑛宗は、自らの戦前の魯迅理解に基づいて、魯迅は中国近代文学の先驅者であり、中国の愛國者である魯迅の精神は、リアリスチックな精神であると考へているのである。

次に、「中國文學の動向」では、龍瑛宗は魯迅について次のように言及している。

中國文學を語ることは、中國の政治社會を語ることである。中國の文學ほど、政治と密接に結びつけられてゐる國は少いであらう。われわれはその典型的タイプを魯迅に見出すであらう。魯迅を語ることは重要である。なんとなれば魯迅の流れは、依然として現在中國の主流の流れであるからである。魯迅の文學的一生は、手で書くよりも、脚で逃げ廻つた方が忙しかつた。それ故に魯迅の文學には、まとまつた長編の中國文學に甚大な影響を及ぼすであらう。因みに延安には魯迅學院があるさうであるが詳しいことは知らない。

上述の如く、龍瑛宗は、魯迅の文學は政治と密接に結びついており、中國の社会的動亂の中で魯迅は落ち着いて文筆活動ができなかつた、そのため長編小説が書けなかつたと考へる。さらに、彼は、魯迅文學が「中国文

学のオーソドックスの流れである」とも指摘している。

最後の「中國近代文學の始祖 魯迅逝世十週年記念日に際して」¹⁵⁾は、『中華日報』日本語版が廃止される前の1946年10月19日、「文藝欄」に楊達の「魯迅を記念して」とともに掲載されたものである。

「中國近代文學の始祖 魯迅逝世十週年記念日に際して」では、魯迅の経歴と業績をざっと紹介し、続いて、魯迅は「白話文運動の工作者の一人」であること、さらに「中國における木刻畫の歴史を繙く人は、魯迅こそが木刻を普及せしめた先覚者であることを知るに至るであらう」と魯迅の木刻運動推進の業績にも触れている。

また、次のように世界文学に於ける魯迅文学の位置づけを示している。

魯迅はロシアのゴゴリーやゴーリキーに傾注し殊に世界における被壓迫民族の文學に注意し、ポーランドのセンキヴィツチを始め、多くの被壓迫民族の文學作品をわが國に紹介した、そして自らゴゴリーの死せる魂を翻譯したりした、彼の出世作「狂人日記」は、中國における最初の白話文小説であるが、これは多分にゴゴリー彼の「狂人日記」から暗示を受けたとはいへ、社會的視野においてはゴゴリーよりも廣いのである。

魯迅には「呐喊」「彷徨」の諸作があるが、その中でもっとも有名なのは「阿Q正傳」である。ロマン・ローランがこれを激賞し既に日本、ドイツ、イギリス、フランスの各國語に翻譯されてゐる、魯迅は阿Qといふ人物を捉へて中國における、弱者をいぢめ、強者に媚びる、ある典型的タイプを示して中國文學史に不朽な一ページを残したのである。魯迅は逝くなつてもう十年になる、魯迅の肉體は滅んでしまつたが、しかし、魯迅の精神は生きてゐる、それは民族精神の覺醒を叫ぶ永遠の聲である。

上述した論点は、戦前の龍瑛宗の文章にも幾らか散見することができるが、魯迅が「多くの被壓迫民族の文學作品をわが國に紹介した」ということは、ここで初めて言及されたことである。

黄英哲は、「魯迅は民族精神を持つ愛国者であるというのが、龍瑛宗の魯迅理解である。龍瑛宗が、戦後初期の台湾に於いて、自らの魯迅理解を通してそのような精神を強調したのは、戦後、中国のみならず台湾においても、民族精神の覚醒が極めて必要なものだとして認識していることを表わしているだろう」¹⁶⁾と指摘している。

しかし、龍瑛宗は、単に「魯迅は民族精神を持つ愛国者」であると理解しただけではなく、魯迅がゴーゴリーよりも「社会的視野」が広いこと、さらに、魯迅が中国における弱者をいじめ、強者にこびる「阿Q」という典型的タイプを作り出したことをも賞賛している。龍瑛宗は、かつて、「彼（ゴーリキー）はもつとも偉大にして民衆的な作家である。彼はあらゆる苦難に遭つても、つねに不撓不屈の精神をもつて劣悪な環境と闘つてきたし、つねに人類の前邊に光明を求めてきたのである。彼は民衆の歡びを歡びとし、民衆の悲しみを悲しみとした。彼は偉大なる民衆の感情の組織者である」¹⁷⁾と述べた。そしてまた、「わが國の魯迅は、中國のゴーリキーと呼ばれてゐるが、この二人の文豪は、それぞれの民衆に與へた精神教育も、蓋し測り知られざるものがあろう」¹⁸⁾と述べている。龍瑛宗は、魯迅に、ゴーリキーと同じく「民衆的な作家」であり、「民衆の感情の組織者」である左翼的作家としての一面を見出していると言えるのではないだろうか。

つまり、戦前に於いて龍瑛宗は、佐藤春夫、増田渉による魯迅の翻訳・紹介などを通し、魯迅への関心を深めた。また、改造社から出版された『大魯迅全集』は彼の魯迅理解に欠かせない翻訳書であった。戦時下の日本で刊行された、魯迅、及び、その他の中国人作家の作品は、日本の読者にとっては外国文学として読むものであったが、龍瑛宗にとっては、それ

らは「祖国」である中国人作家の作品であった。しかし、植民地支配の下では、民族的な視点によって理解した魯迅の文学について、そのまま表現することは許されないものだった。それゆえ、彼が「パイヤのある街」で作中人物に魯迅の作品を語らせていることは、中華民族としてのひめられた親近感の表現であり、ただ単に魯迅を左翼作家としてのみ扱っているのではないと思う。戦時下に書かれた「二つの〈狂人日記〉」では、中国左翼作家や民族精神を持つ愛国者魯迅としては語られず、代わりに魯迅は世界文学の中の一文学者としてさりげなく論じられている。しかし、戦後初期に至り、台湾が中国の一部になってからは、龍瑛宗は、中国文化紹介の中で魯迅の民族精神をはっきりと顕彰している。つまり、龍瑛宗の魯迅理解は、日本における魯迅受容の影響下から出発し、時代の変遷に従って変わっていったが、魯迅を中国左翼作家として理解する点だけは戦前から一貫して変化していないと言えるのである。

3. 戦後初期中国文学の紹介

龍瑛宗の読書経歴からみると、戦前から彼は、台湾に入って来た日本の雑誌を通じて中国現代文学作家や作品にも触れている¹⁹⁾。戦後になると彼は、台湾社会の再建と「新中国」の建設に貢献しようと考えていた。それゆえ、中国文学の紹介も広く世界文学の視野に立って行っている。編集者をつとめた『中華日報』日本語版の「文藝欄」や「名作巡礼」で、龍瑛宗は数多くの外国文学を紹介した。そのうち中国のものは次の通りである。「名作巡礼」には、魯迅の「阿Q正傳」、劉鐵雲の『老殘遊記』、沈復の『浮生六記』の三作、「文藝欄」には「臺北時代の章炳麟 亡命家の一つの挿話」²⁰⁾、「個人主義の終焉 老舍の『駱駝祥子』」²¹⁾、「中國文學の動向」などを掲載している。又、ここでとり上げられている文学作品は、何れも戦前日本語に訳され、出版されたものばかりである。彼は、中国語がまだ上達していなかったので、ここで取り上げている作品はすべて翻訳で読ん

だものである。龍瑛宗がこれらの作品を紹介した主な理由の一つとして、日本語の翻訳が存在していたことが指摘できるだろう。

では、彼は、どのような基準によって中国文学を評価しているのだろうか。又、龍瑛宗はどのように中国文学を受容していたのだろうか。

まず、『駱駝祥子』について。龍瑛宗は、「老舎の〈駱駝祥子〉こそは、近代的科學的な洗禮を受けたレアリズム作品であつた」、駱駝祥子の「人生における唯一つの希望は、唯一つの自分持ちの一臺の人力車、これはかのゴーゴリーの〈外套〉に出てくれる哀れな主人公に似てゐるのではないか」。また、その「駱駝祥子の人生行路は、悲惨な没落の一途を辿るばかりであつた、そして夜ごとに暗涙と溜息を飲んで怖るべき薄倖の生活を終わるのである。これは、エミール・ゾラの傑作「居酒屋」のかの女主人公の悲惨な最後に彷彿するものがある」と述べている。

「阿Q正傳」については、紹介文の冒頭に「中國近代文學において、魯迅の〈阿Q正傳〉ほど有名なものはないであらう。阿Qといふ言葉はハムレットや、ドン・キホーテや、シヤイロツクと同じほどに、一つの固有名詞となつて、ある人間タイプの一つの典型を表現するやうになつた」と述べている。

また、『老殘遊記』については、「それで近代の小説から論ずれば、消えゆく生命に対する魂の哭泣は聽えるが、しかし作品としては渾然たる藝術味がなく、構成も内容も緻密とは言へない。東洋は西歐におけるやうな体系的な純粹理論の發展がなかつた。(中略) 學問自身の冷嚴な基礎的な理論的展開の缺除は缺点であり、中國における五千年文化の停滯の一原因をなしてゐる。この意味において、『老殘遊記』も一應の内容を整へてをりながら、世界文學の水準からみれば、かなりの距離がある」と述べている。

『浮生六記』については、「われわれは西歐の文學作品を讀めば、その背後に社會があることを思はせるが、しかし、東洋の作品の背後には社會が紛失してゐる、それは東洋の不幸を胚胎してゐるのであつて〈浮世六記〉

もその一つの典型である」と述べている。

上述の如く、龍瑛宗のこれらの作品に対する批評は、世界的な近代的文学の評価基準によっているものと言える。ここから、日本統治期に成長した台湾人作家の中国文学の受容の傾向を窺うことができるだろう。つまり、彼は、積極的に中国文化を紹介してはいるが、ただ当時文化の「祖国化」の要請に応じてこれらの作品をとりあげているのではなく、世界文学の教養としての観点から中国文学を評価しているということなのである。

戦後初期、龍瑛宗は、台湾文学を中国文学の一環としてとり上げ、台湾人作家の作品については、楊達の「新聞配達夫」²²⁾と吳濁流(1900~1976)の「胡志明」²³⁾二作のみを評している。

では、龍瑛宗は、この二作を中国文学の中でどのように位置付け、どのように評価しているのだろうか。

まず、楊達の「新聞配達夫」について、龍瑛宗は、「苦難の道を辿る臺灣の文学が、かくも見事な結晶を得、聲なき聲の暗黒時代を潜り抜けて再びわれわれの眼前に現れた。」「若し作者がこの母を主題にもつとレヤリストックに描けば、そこにゴーリキーの「母」にも比すべきものが生まれるであらう。(中略)臺灣文學の記念すべき作品であり、りつぱな中國文學であると信ずる。たとへ藝術的完成において西歐の先進諸國に比して聊か遜色があるにしても、しかし文學的精神において最高のものを持つてゐるのである。人物の性格と影陰、作品の構成についてもつと攻究と彫琢を加へるべきと思ふが、しかしこれは傑れた作品であり、臺灣文化界、否中國文化のためによろこぶべきことである」と述べている。戦後初期の時点で、龍瑛宗は、楊達の作品を、台湾文学の作品としてばかりではなく、さらに中国文学の作品として、同じく世界文学の基準によって批評し、先輩作家である楊達のプロレタリア作家としての文学精神を高く評価しているのである。

吳濁流は、1943年から『胡志明』を書き始め、1946年9月3日に至って、

はじめて単行本『胡志明』²⁴⁾ 第一篇（台北國華書局）を出版した。呉濁流は、龍瑛宗より年上であるが、文学経歴は、龍瑛宗の方が古い。それゆえ、彼は、先輩作家として、「この作品は消えゆく風俗を、文學といふ形象を通じて保存してゐるところに文學使命の一端は果たされるであらう。尚、作品『胡志明』はいまのところライト・モチーフが浮かんで來ないので、印象が集中されずに散漫になつてゐる感じがする」と批評する。だが、その一方、龍瑛宗は、「呉濁流氏の『胡志明』といふ小説は日本語といふ表現を用ゐながら、この小説の構成といひテンポといひ、ニヤンスといひ、疑ひもなく中國文學の傳統を引いてゐることを言ひたい。それゆえに〈胡志明〉という花は不思議な花である」という評価もしている。ここで彼が評価しているのは、中国の古典の素養もあり漢詩も作る呉濁流が日本語で『胡志明』を書き、しかも、中国の章回小説のようにプロットを展開している点にあるのではないかと思う。

つまり、龍瑛宗は、西洋の近代文学の評価の基準によって、中国文学の一環として台湾人作家の作品を検討しているのである。しかし、彼は、「文學についていへば、中國よりもやはりヨーロッパ文學の方が進んでゐるし、われわれが中國文學を向上するためにも、ヨーロッパ文學の内容と技術を學ばなければならぬのだ」²⁵⁾ と考えていたのである。

結 び

龍瑛宗の中国文学の教養は、日本における中国文学の翻訳を通じて得たものである。彼は、魯迅に対しての理解も日本における魯迅観に影響され、また、時代によって魯迅に対しての理解と紹介も変わった。だが、中国左翼作家としての魯迅に対する認識をずっともち続けた。彼は、日本語による翻訳文学によって、文学的教養の視野を広げ、戦後初期においては、中国文学の一環としての台湾文学と中国現代文学を、世界文学の基準に基づいて評価し、紹介している。彼は、台湾文化再構築の運動の中で、文学の

力を発揮しようと思った²⁶⁾。だが、1946年2月陳儀政府により台湾文化の毒素を除去するという名目で、日本語の出版物が禁止された²⁷⁾。1949年5月20日戒厳令が実施された後は、「台湾省戒厳期間新聞雑誌図書管理義辦法」第四條第三項によって日本語の書物の輸入が厳しく検閲され、日本語教育を受けた台湾知識人の知的権利は奪われた。

戦前、龍瑛宗は、宗主国の言語を通じて祖国の文学を認識すること以外方法がなかった。「帝国主義の鎖は、僕の手足を縛りつけて僕は唄ふことができずに、哀れにもロマンチズムの旗をひそやかに振っただけでいる」と述べている²⁸⁾。中国文学の知識を獲得するために、彼は、戦後なお植民地の遺産である日本語を通じて創作題材を探した²⁹⁾。植民地作家は、戦中は、宗主国の言語である日本語の使用に悩まされ、戦後は、日本語使用者であるが故に知的権利を奪われたのである。知識を得るためのこのような屈折した過程が植民地作家にとって一体どんな意味をもつのか、日本の翻訳文学は、植民地の文化にどのような影響をもたらしたのか。これらは植民地研究に於ける文化的課題としてさらに深く考察される必要がある。

注

- 1) 劉榮宗（龍瑛宗の本名）「太平天国(一)」、『中華』創刊号，1946年1月20日。
- 2) 岡崎俊夫「日本における魯迅観」、『魯迅案内』（『魯迅選集別巻』），岩波書店，1956年10月22日。
- 3) 中島利郎によれば，第一期1923年～1931年（大正12年～昭和6年）は，魯迅文学の紹介の時期である。大陸中国での「文学革命」が台湾に紹介されると同時に，大陸に赴いた台湾人により『臺灣民報』誌上で魯迅やその作品や紹介が行われた。第二期1932年～1936年（昭和7年～昭和11年）は，魯迅文学受容発展の時期である。主に，日本経由での魯迅紹介が，台湾の文芸各誌で行われた。第三期1937年～1945年（昭和12年～昭和20年）は魯迅文学の内在期である。第一期，第二期には，主に中国語によって魯迅が紹介されたが，第三期は台湾の雑誌新聞等において原則的には中国語の使用が禁止され，日本語のみの使用が許された時期であるとされる。（中島利郎「日本統治下の

台湾新文学と魯迅』、『台湾新文学と魯迅』，東方書店，1997年9月30日，47～87頁）。

- 4) 王恵珍『龍瑛宗研究——台湾人日本語作家の軌跡』（関西大学大学院文学研究科中国文学専攻，課程博士学位申請論文）第一章第一節「龍瑛宗の読書経歴」を参照。
- 5) 龍瑛宗は、「我於26歳時，知道了韓國的作家張赫宙當選改造懸賞，既然人家會創作我也應該試一試吧。」（「怎麼樣也看不懂」，『開南校友通訊』，1986年7月15日）と述べている。
- 6) 増田渉「魯迅の印象補記」，『魯迅の印象』，角川書店，1970年12月20日。
- 7) 室伏高信「魯迅の印象」，『讀賣新聞』，1931年10月20日。
- 8) 葉山嘉樹「顯かな精神〈パパイアのある街〉改造四月号」，『帝國大學新聞』，1937年3月31日。
- 9) しかし，龍瑛宗は，「僕は嘗てパパイアの街への批判の批判といふ拙文のなかにゴゴリーや魯迅などを引用したら臺灣の某氏から，僕をその巨匠らと同列に置く思ひ上つた誇大妄狂として，きついお叱りを受けたが當時僕はじつに情けない氣がして意氣消沈してしまつたことがあつた」（「作家言〈趙夫人の戯畫〉を終へて」，『臺灣新民報』，1939年10月17日）と述べている。
- 10) これは，『臺灣新民報』文芸欄に1940年5月31日から2月14日にかけて連載された「ゴオゴリとその作品 初めて文學せんとする人の為（一）～（十四）」のうちの「六」に当る。
- 11) 「我怎麼做起小説來」は，『大魯迅全集』第四卷（鹿地亘，日高清磨瑳訳，1937年5月19日）では「私は如何に小説をつくり始めたか？」の題名で訳されている。この訳文は増田渉の訳文とは異なる。
- 12) 八住利雄他訳，『ゴオゴリ全集』第4卷（短篇小説集），ナウカ社，1934年7月。これは龍瑛宗が所蔵している。
- 13) 「二つの『狂人日記』」は龍瑛宗の文学評論集『孤獨な蠢魚』（1943年12月1日，盛興出版部）にも収録されているが，これを『文藝首都』（8-10）の初出作品と比べると，以下の三箇所に削除された個所がある。一つは，ゴゴリーの「狂人日記」からの引用文の中，「何故おれを苦しめるのか？ 可哀さうなおれにどうしろつて言ふのだ？ おれは何も與へることなんか出来やしない！ おれは何も持つてゐやしない。からだかもたん，こんな虐待に堪へられるものか。頭はかつと燃えるし，何もかも眼の前で廻轉する」の個所。一つは，「〈サランポオ〉といふ小説を思ひだした。もちろんサランポオは……。」の個所。一つは，『呐喊』序の引用のうち，「たとへば一間の鐵部屋，

それはどこにも窓がなく、而もほとんど壊すことが出来ないもので、その内部に大勢熟睡する人々がゐたとしたら、久しからずして皆悶死するだろう。然し彼等は昏睡から死滅に入るのだから、決して死の悲哀を感じない。それを今、君が大声あげてやゝ目の覺めかゝった幾人かを驚き醒したならば、この不幸なる少数者をして救ひ戻しやうのない臨終の苦しみえお受けさせることになる。君はそれでも彼等に氣の毒とは思はないのか？

しかし幾人は己に起き上つたとしたら、此鐵部屋を打ち壊す希望はあり得ないものと言ふ事は出来ない。

これは魯迅の小説集『吶喊』に書かれた序文の一節であるが、魯迅の文學を解くひとつの鍵だといへよう」の個所である。

- 14) 下村作次郎「戦後初期の台湾文学」、『文学で読む台湾 支配者・言語・作家たち』、田畑書店、212頁。
- 15) 1946年、「魯迅逝世十週年」を記念して、台湾の新聞雑誌には次のような文章が掲載されている。楊達「魯迅を記念して(詩)」(『平和日報』副刊、1946年10月19日)、許壽裳「魯迅與青年」(『平和日報』、1946年10月19日)、許壽裳「魯迅的德行」(『平和日報』、1946年10月21日)など。『臺灣文化』1-2(台湾文化協進會、1947年11月1日)の「魯迅逝世十週年特輯」には、楊雲萍「記魯迅」、許壽裳「魯迅的精神」、高歌詠「斯莱特記魯迅」、陳烟橋「魯迅先生與中國新興木刻藝術」、田漢「漫憶魯迅先生」、黃榮燦「他是中國的第一位新思想家」、雷石楡「在臺灣首次紀念魯迅先生感言」、謝似顔「魯迅舊詩錄」等。他に、朱嘯秋「魯迅孤僻嗎？」(『臺灣新生報』、1946年11月4日)、遊客「中華民族之魂！」(『正氣』1-2、1946年11月)がある。(中島利郎編『台湾新文学と魯迅』、239~240頁)
- 16) 黄英哲『台湾文化再構築(1945-1947)の光と影 魯迅思想受容の行方』、創土社、1999年9月、152頁。
- 17) R(龍瑛宗のペンネーム)「海燕(ゴーリキー作)」、『中華日報』、1946年10月23日。
- 18) R「私の大学(ゴーリキー作)」、『中華日報』、1946年6月13日。
- 19) 同注4。
- 20) 「臺北の章炳麟 亡命家の一つの挿話」に書かれた章炳麟の経歴は、神田豊穂編、『大思想のエンサイクロペディア』第24巻(思想家人名辞典、日本春秋社、1928年4月)の項目「章炳麟」から引用したものであると考えられる。この本は龍瑛宗蔵書にある。
- 21) 龍瑛宗の蔵書にはないが、当時翻訳されていて、龍瑛宗の目に触れた可能

性のあるとして、老舍著、竹中伸訳『駱駝祥子』（新潮社、1943年3月）がある。

- 22) 龍瑛宗「血と涙の歴史 楊逵氏の『新聞配達夫』」、『中華日報』、1946年8月29日。
- 23) 龍瑛宗「伝統の潜在力 吳濁流の『胡志明』」、『中華日報』、1946年9月28日。
- 24) 1946年10月10日『胡志明』第二篇「悲戀の巻」、11月20日『胡志明』第三篇「大陸篇」、12月25日『胡志明』第四篇「桎梏の巻」が民報総社から出版された。（『光復後臺灣地區文壇大事紀要』、行政院文化建設委員會、1985年6月）この四冊は、『アジア孤児』として出版されたものの最初の版本である。龍瑛宗は、「崎嶇的文學路——抗戰文壇的回顧」でこの小説の命名と日本での出版について言及したことがある。
- 25) R「海燕（ゴーリキー作）」、『中華日報』、1946年10月23日。
- 26) 戦後初期台湾文化再構築の運動について黄英哲『台湾文化再構築（1945-1947）の光と影 魯迅思想受容の行方』を参照。
- 27) 薛化元等編註『戦後臺灣民主運動史料彙編（七）——新聞自由』、国史館、2002年、40～41頁。
- 28) 龍瑛宗「初恋」、『中華日報』、1946年8月29日。
- 29) 晩年文筆活動再開後、彼は、日本語の資料を参考にし、中国語で小説「杜甫在長安」（『聯合報』、1980年10月25日）を書いた。小説文末の注に三冊の書名が記されている。『長安之春』石田幹之助著、創元社。『玄奘三藏』前島信次著、岩波書店。『杜甫私記』吉川幸次郎著、筑摩書房。